

高千穂夜神楽：奉仕者、神庭

地元の神である氏神様をはじめとする様々な神様を讃えるための贈り物として行われる神楽を催すにあたり、神々をお迎えするのにふさわしい、神聖な舞台「神庭」を使いが準備します。

男性のみがほしやどんと呼ばれる使い、また踊り手になることができます。

高千穂での準備は依代という、神々を召喚するために目印にもなる建物の構築から始まります。神楽殿の外に、装飾された3本の長い竹が立てられます。

これらの竹はしっかりと固定されていなければなりません、神々にとっても魅力的なものでないといけません。

約20の堂に神聖な舞台が収容されます。これらの舞台で、高千穂の村それぞれの独自の演目が、11月中旬から2月のそれぞれ異なる夜に行われます。

穀物の成長を促す水の神が、山から降りてくるための準備として、清浄ともてなしの空間を清めるための舞をしなければなりません。この伝統は能などの他の日本の伝統芸能でも行われる慣習です。この舞を見た観客は、次はどうなるのかと興奮します。

すぐに、神様は色とりどりの光をまとって現れます。赤ら顔や金髪のものもあるかもしれません。そして、それからは日本神話の神々、女神についての33の舞の演目が続きます。

横笛と太鼓の活気に満ちた音が神聖な庭に響き渡り、御年寄にも若者の耳にも心地よく響きます。

この儀礼的芸能の最中に、一年に一夜、天と地との調和、聖なる自然と人間の文化を祝して演者も神々も一体となります。